

日本救世軍山室家の女性たち

民子・富士・阿部光子（1924年～1944年までを探る）

牧 律

はじめに

筆者は日本救世軍創始者山室軍平の長女民子についてこれまで関心を持ち研究を進めてきたが、今回新たに民子在英に関する資料や1944年（昭和19）に9ヶ月間に渡って記された民子の個人日記を読む機会を与えられ、これまで深めることができなかった留学から戦中期の彼女について、一歩深めた考察をすることが可能になった。

また民子だけではなく軍平の長男武甫の妻富士と、富士亡き後後妻に入った阿部光子⁽¹⁾についても、これまでほとんど紹介されなかった彼女たちの姿を新たに知ることとなり、民子と共に戦前までの山室家を支えた彼らの姿をここに紹介する。彼女たちの生き方は「救世軍の母」と言われ、他者救済に一生をかけ、軍平に「あなたの一生は救世軍の犠牲の人生であった」と言わしめた⁽²⁾機恵子の精神を継承した道であったのだろうか。そのような問いが本稿の基盤にある⁽³⁾。

I 民子について

(1) アメリカ留学—その動機について

民子は戦後文部省に視学官として招聘され、一躍世間に知られる人となったが、留学に至った経緯やアメリカで献身を決意した経緯等、戦前までの彼女についての詳細はこれまで殆ど知られていない。

救世軍資料館に保存されている昭和28年月8月20日に民子が労働省婦人少年局長宛に提出した自身の履歴書のコピーによると、民子は1924年(大正13)3月東京女子大学英語専攻科卒業後、同年8月カリフォルニア大学に入学し、1927年(昭和2)5月同大学文化社会学部を卒業した。その後5月～9月シカゴ大学で社会学及び英文学を修め、その間ジェーン・アダムス女子のハルハウスを中心に社会事情視察を行い、同年9月在ロンドン救世軍万国士官カレッジ入学とある。

まず民子がアメリカ留学を決意した動機であるが、その点について彼



民子

女が述べている記述はほとんど見あたらず、筆者が確認することができたのは『主婦と生活』1949年9月号に掲載された「私はこうして世に出た一神への道ひとすじに」だけである。

少女時代私は身体が弱く女学校も卒業しなかったのですが、東京女子大学に入学しました。その頃から人生に対する乙女らしい夢が芽生え、未来への希望に胸がふくらむのでした。

いい小説が描きたい—これは元来文学少女だった私の大きな望みの一つでした。結婚—これもまた。世の常の多くの乙女たちのように、いみじくも幸福な幻影となって浮かぶのでした。私には自分の未来が美しい七色の虹のように輝かしいものに思われるのでした。そして私にはただ人のためにもみ働いて一日中忙しくしている父母の生活が、その生活を継ぐことがとても耐えられなくなったのです。父母の許にいては、私は幸福になれない。結婚もできないかもしれない⁽⁴⁾。でも私は父母を愛し尊敬していました。父母とともに居るべきか。自分一人の道をゆくべきか。私は日々この二つを考え悩みました。そうしてその結果自分のほんとうの道を見出そうと渡米を思い立ったのです。

民子は女学校在学中に軍平から「救世軍士官になって欲しい」と雑誌に公表されたことがあり、そのことで同級生からからかわれ相当傷ついた過去があった⁽⁵⁾。当時高潔な社会事業家として世に知られた軍平の娘であるため、当然同じ道に進むのであろうと周囲が期待したことに民子は悩んでいた。それゆえ家族と距離を置くことのできる海外留学こそ、自分の可能性を探ることができる手段であると思春期の彼女が考えたのは当然であろう。

渡米した彼女は、軍平・機恵子の娘であることを知られずに済むアメリカの地で生き生きと勉学に勤しみ、渡米前は療養所に入院するほど虚弱だった身体も回復し、健康に恵まれ楽しく充実した生活を送ることが

できたと記している⁽⁶⁾。

(2) 民子がアメリカで受け取った軍平の手紙

しかしながら民子は快適に過ごしたという米国の地においても、軍平の影響力から全く放たれてはいたわけではないようだ。

彼女の著書『愛は永遠に一愛と信仰』には、民子がアメリカで受け取った軍平からの手紙が二通紹介されている⁽⁷⁾。

最早ハワイを出立した頃ならんと思いつつこの手紙を書くのである。出立後毎日風が吹くにつけても、航海の安全を祈らざる日とはなかったが無論此の手紙のつく頃とはとくに、無事基地に着きて居られる事を信ずるのである。健康に障りはなかりしや、海は穏かなりしや、種々の尋ねたい気がする。しかし過去のことより大切なのは、今後のことである。なんとか好都合に落着いて、やがて勉強の道の開くやう切に願うのである。さうして出立の際にも言ったように、低いセコンダリイの動機からではなく、何は兎もあれ、まず神の国と其の義とを求め、生涯を挙げて最もよく神の栄を題し又最もよく世の救いを助くるには、どうしたら可きかと其の標準で事をする方針をとってもらひたい。「神がなれといふ儘になり、神がなせと宣うまをなす。」此のごときものが父が去る十四年の覚悟であった。固より思ふ所の十分の一を実行しえないけれど期する所はそこにあったのである。千本木さんが来られてシアトルを経、加州の方へ回らる由話された⁽⁸⁾。二十六日の船で出立せられた筈である。宅には變りなし。武甫さんがSSに熱心になって居るのが何より嬉しい。救世軍からは新に添田、丸山及び秋元の三君を渡英せしむることになった。秋元くんはエディトリアルの研究をして早く帰るべく、他の二人は一年間士官学校に入るべき筈である。父の出立はどうしても来春になるらしい。佐々倉氏へ宜しく。體を大切にせられたい。

誰にもまさって天の父に萬事を訴へ、其の御導きと御助けとにすがって
もらひたい。御祝福を祈る。敬具 1924. 5. 2 民子殿

2 通目の手紙

拝啓 7月1日神戸より乗船、(中略) 7月12日は母の記念日だ「ノー
タブル・オフィサス・オブ・ゼ・サルベーション・アーミー」(救世軍名將
伝)の中、母の伝を読んで涙を拭ふた。どうか、あの母の精神がお前に宿っ
てくれるやうに祈るのである。(中略) お前はおまえでなければできない神
の御用を志すやうにあつて欲しいと祈るのみだ。日本の救世軍ももっと教
養ある男女の士官を要する。御旨ならばお前が亦其の一人として起ち得る
やうにと父は尚その為祈ることを止めない。神がその最善の聖慮をなさ
せ給わんことを。英国に行ったらお前の手紙に接し得んことを願っている。
植村少佐と同行中だ。

小林中校その他へ宜しく。(中略) 御身御大切に下さい。

1925.7.15 民子殿

いずれの手紙においても軍平が一番に民子に望んだことは、神の国と
神の義とを求め、最もよく世の救いを助ける道を模索する信仰者になれ
ということである。

彼が「低いセコンダリーの動機」と呼んだものは、恐らく世間一般の
人が洋行留学する目的として掲げるスキルや学問を極める類のものであ
ろうが、これを彼は全く価値のないものとして切り捨てている。

さらに2番目の手紙では「あの母の精神がお前に宿って欲しい」「日
本の救世軍には教養ある人が必要であり民子がそうなってくれるように
毎日祈っている」と述べ、機恵子が示した他者救済に一生を捧げる生き
方を民子に継承してもらいたいという軍平の願いが示されている。自分
の本当の道を見出そうと渡米した民子にとって、時折来るこのような手

紙は、親の願いの深さを再確認するものであり、読むたびに心が揺れたのではないかと考える。

(3) 小林政助夫妻の存在

また留学中の彼女と深い関わりを持ったと考えられる人物に小林政助・徳子夫妻がいる。以下がおおよその経歴である。

小林政助（1883-1940.10.10）は在米日本人教会牧師後に救世軍士官となった人物である。1902年渡米しウエストミンスター大学に入学。卒業後日本人YMCAを創立しその会長を務めた。

1909年カリフォルニア州長老派のサリナス教会の牧師となり伝道をしながらスタンフォード大学で学ぶ。1911年大久保真次郎⁽⁹⁾らが中心となって組織した超教派の基督教伝道団の専任幹事に就任。彼の一大転機となったのが、1911年渡欧し、救世軍本営に行った帰りにアメリカに寄った軍平に出会い、救世軍入隊を決意したことである。それを契機として1918年はるばる東京に戻った夫妻は、救世軍士官学校で半年間学び再び渡米、アメリカの地で伝道に尽くしている。

政助の妻徳子も夫と共に救世軍に帰依したが、それまでにおいても1912年2月に発足したYWCAの初代幹事を務める等、既にその活動ぶりは夫ともによく知られていた⁽¹⁰⁾。

軍平は先の手紙の中で「小林中校によろしく」という伝言を書き添えている。武甫は自身の著書の中で「民子は在米中小林夫妻の世話になることが多かった」と記している⁽¹¹⁾。

以下は民子が献身の決意を固めたことについて、軍平が小林政助に礼を述べている手紙である⁽¹²⁾。

拜啓四月二十七日附御懇書難有奉存候、転送シ来リテ伊予ノ松山ニテ拝見致候。過ル三年ノ長キニ亘リ、大兄及ビ夫人ヨリ受ケタル御援助御指導

日本救世軍山室家の女性たち

ハ、真ニ大ナルモノ有之、何ト御礼申上グベキヤヲ知ラズ候。サナキダニ軍務多端、大兄及ビ夫人ノ心ヲ身ヲモ疲ラスルニ足り候モノヲ、カカル箇人ノ事ヲ以ッテ、更ニ多クノ御心配ヲ賜リシ事ヲ、イツ迄モ銘記シテ、忘レ申スマジク候。民子ノ此度ノ決心ハ、至ッテ嬉シク候。殊に前書ニテ御勧誘下サレ候如ク、太平洋神学校ニテ、所謂自由神学ナド教ヘ込マレ候ハバ、ソレト我々ノ単純ナル信仰トノ調和ヲ得ル迄ニ、復又一方ナラヌ苦勞ヲスル事ナルベク案ジ居リタル所ニ有之、御尽力ヲ心カラ奉謝候。

只、「ロンドン」ヘ九月ニ行ツタノデハ、士官学校が最早始マリ居ル頃ニテ、恐ラク向コウデハ、途中カラノ入学ヲ許スマジク、サウスルト宙ブラリン状態ニテ、一年ヲ過ス事ニナリハセヌカト心配致シ、乃チ出先カラ暗号電報ヲ以テ、ギツフォード中将ニ宛テ、別紙ノ如ク申送り候。広島ノ田舎ニテ打チシ事故、ヨク間違ナク打電シテクレタ事ヲ願ヒ候。而テ中将カラ倫敦ノ士官学校開始日ヲ、民子ノ方ニ御知ラセ下サレ、ソレニ間ニ合フヤウ、旅程ヲ定ムル事トナラン事ヲ切望致候。(開講日ハ八月十九日頃ラシク候)。渡英ノ旅費等ニ付テハ、大兄ヲ煩ハスハ、ドウシテモ思ヒ難キ事ニ候。ソノ儀ニ付テハ先ニマツプ、ギツフォード両中将ニ御願申上ゲオキタル所モアリ、精々便宜ヲ与ヘラレン事ヲ願ヒ候。何レニシテモ、今日迄ノ御高配ヲ厚ク御礼申上ゲルト共ニ、何分此ノ上ノ御尽力ヲ切ニ御依頼申上候。夫人ヘ宜ク御伝ヘ下サレ度候。御祝福ヲ祈居候。

小林参軍 殿

山室 軍平 拝具

この中で軍平は民子の献身決意を非常に喜んでいますが、彼がそれをもどのようにして知ったかについては語っていない。しかし4月27日附で書かれた政助の手紙を伊予松山で受け取り、その返信としてこの手紙を書いているので、その政助からの手紙で知った可能性は十分あると考えられる。

また特に印象的なのは、民子が在米中小林夫妻から受けた援助や指導について軍平が多大な感謝をしている点である。それは太平洋神学校⁽¹³⁾で自由神学の影響を受け、それに影響されて救世軍の教えに懐疑する可能性があったこと、しかし小林夫妻が彼女をよく見てくれたので、その影響を受けずに済んだと述べている部分である⁽¹⁴⁾。

さらにせつかく民子が献身の決意を固めたのであるから、速やかに士官学校に入学できるようギツフォード中將に依頼するつもりであること、そのような手はずを整えるので、士官学校の入学日を民子に知らせてくれるようにと政助に依頼をしている。その文面からは、献身の決意が翻えられないうちに、迅速に民子を入学させようと画策し、打てる手を打とうとする軍平の手際の良さが見えてくる。

政助は既に十分な伝道や活動基盤を西海岸に築きながら、軍平に出会ったことで彼に心酔し、それまでのキャリアを捨てて救世軍に身を投じた宗教的情熱の深い人物である。そのような人物であったから、彼は親として娘民子の献身を切に望む軍平の気持ちを十分察していたのではないかと思われる。それゆえ一層手厚く在米中の民子の世話をしたのではないだろうか。

また軍平はこの手紙より前の1927年(昭和2)に、「わが子に語る」「宗教は貧乏な時に純真である」という記事を『婦人之友』2月号に発表し、その紙面で子供たちに向かって以下のように言い切っている⁽¹⁵⁾。

(前略) 靈魂を救って神に帰らしめ、人々を愛に生きる者とならしむ結果、一歩一歩地上に天国を建設するという最も肝要なる事業が、今では一番世から閑却されている。この点を等閑にしては、政治も教育も実業も凡て空である。それ故お前方は格別にこの方面に心を致さねばならぬ。身を捧げて神の御国の為に立ち上がれ。世にあらん限り愛の奉仕の為に尽くせ。これ位有用にして神々しい生涯というのは断じて他にないのである。父はお

前方が真に万人の公僕となり、救世済民の為に一生を捧げて、最善の努力を致さんことをのみ、折心から祈る。(中略) 何卒父の意中をよく汲み取り失望を与えぬように心がけてもらいたいものである。

この記事に掲載した『婦人之友』2月号が同年1月に販売され、軍平が政助から受け取った手紙が4月27日附であることを考えると、おそらく民子は献身の決意をする前にこの記事を読んだのではないかと、そしてこの記事が民子の決意の最終的な後押しをしたのではないかと筆者は推測する。

『花巻が育んだ救世軍の母—山室機恵子の生涯—宮澤賢治に通底する生き方』の著者安原みどりも、「軍平の強い思いが民子の進路を決心させたのではないかと述べている⁽¹⁶⁾。

民子がこの記事を読んだという具体的な記述はないが、心が揺れている時に目にした可能性は否定できない。父が望む「万人の公僕」も「救世済民に一生捧げること」も、民子にとっては自分の意思を優先することの前に立ちはだかる否定できない大義であったに違いない。

(4) 献身への決意

ところで民子はアメリカで献身を決めた時の心持ちを後に何度も記しているが、例えばそれは「全世界を貫くとも己が生命を損せば何の益あらん」という聖句に打たれ生涯の方針を大転換させたフランシスコザビエルに自分を重ね⁽¹⁷⁾とか、「再び得たこの生命は、自分一個の幸福のため用うべきではない、神のため、人のために役立てなければならない、そのために私もまた父母の歩んだ道を参ります。」⁽¹⁸⁾というように、自己陶醉感に満ちた表現でその心持ちを表している。

しかし民子は万国士官カレッジの志願願書を記入した際、結婚に関する箇所（士官同士の結婚のみ許可する規定に同意）は最後まで残して

おき、何度もその規定の数行を反読した後、ついに Yes と記入したと語っている⁽¹⁹⁾。また帰国後アメリカの大学時代の男友達が結婚したいと彼女を訪ねて来たことを後年記している⁽²⁰⁾。このような記述を読むと、自由な結婚ができない救世軍の士官にはなりたくなかっただろうと想像するし、このような潔さをアピールするような献身決意の記述を読むたびに、そのような表現を用いて自分を奮い立たせた彼女の心持ちにやるせなさを感じるのである。

民子はカリフォルニア大学在学中、日本からの女子留学生で全科を終了し卒業したのは彼女が最初であったため大切に扱われ、大学総長夫人、女教授、YWCA 指導者達の好意を受け、多くの場に出席する機会を得たという。そして軍平が渡英の途次立ち寄った時には、お供をして太平洋沿岸に住む邦人を訪問したと記している⁽²¹⁾。

そのような記述を読むと、多くの人に認められ充実した民子の在米生活ではあったが、同時に在米日本人キリスト者や基督教婦人矯風会の千本木道子のような、日本から渡米してくるキリスト教界の人々から、民子は軍平の娘であるが故に大切に扱われ、期待された面もあるのではないかと考える。

以上の事柄を検討すると、民子の献身決意はその道以外の選択に価値を置かない強固な軍平の意志が大きく介在しているが、同時に軍平を尊敬し、彼の意思を後押ししたであろう小林政助や、その周辺の人々の民子への期待も、彼女の最終的な決断に影響を与えたと考えらるべきであろう。

(5) 英国での民子

楽しい学生生活を送ったアメリカを去り、英国に移った民子は万国士官カレッジ (International Training College) に入学する。

London の Denmark Hill にある William Booth College 資料館 (International Heritage Center) に保管されている民子の履歴

カード (Staff Officer' s Career) によると、民子は 1927 年 9 月 23 日に万国士官カレッジに入学し、翌年 5 月 7 日に卒業している。同日見習い士官 (Pro.Captain) となり、5 月 10 日には special training を受け、5 月 24 日に未婚の母と乳幼児の施設である Cotland⁽²²⁾ に派遣されている。

Cotland は 1912 年に開設された施設で、後年民子は著書の中で「当時の英国救世軍の婦人社会事業部は非常に大きく、その本営支配下に働く婦人士官は 500 人、その保護の下で休む婦人子供老人の数は毎夜 3000 人を下りません。同本営は諸方面に目覚しい仕事を企てているのですが、その中でも色彩を放っているのは母性保護の働きだろうと思います。(中略) プース婦人はかつて『この働きは私共の社会事業の中の最も重要なものの一つです。なぜならこれは救済事業であると同時に予防事業だからです。』(後略) と言われました」⁽²³⁾ と英国救世軍における女性事業部の働きの大きさについて紹介をしている。

さらに民子は Cotland だけではなく Glasgow にある「不幸な少女の為の寮」にも滞在、その他「刑務所伝道」や「街の女性の救済事業」にも携わり、相当の責任を持たされていたと語っている⁽²⁴⁾。

当時救世軍の女性たちの活動を紹介していた冊子 THE DELIVERER には⁽²⁵⁾、民子執筆の記事が掲載されている。筆者が確認した限りでは 1929 年に掲載された記事 4 点 (1 月, 7 月, 9 月, 10 月) と、1932 年 12 月号に掲載されている 1 点を見ることができた。それは以下の 4 点である。

- ① Women' s Social Work in Scotland by Captain Tami Yamamuro, January 1929. Glasgow で奉仕活動をした時に見た不幸な少女たちのシェルターの様子の紹介。
- ② The Opening of the Aikman, Eventide Home, Bath described by Captain Tami Yamamuro, July, 1929 施設の様子の紹介。

③ Japan in California by Captain Tami Yamamuro

9月10月と二回に渡り掲載。北米カルフォルニア州で奉仕事業に励む小林政助の人とその奉仕事業の紹介である。またカリフォルニアに住む日系移民たちの苦勞と、日系人のために救世軍が設置した老人や子供のための福祉施設の紹介も入れている。

④ Out of the Prison House – How over 7000 Japanese Girls have fled to the Army from ‘Worse than Slavery’ by Captain Tami Yamamuro, December,1932

救世軍の廢娼運動によってこれまで7000人以上の女性たちが苦界から救われたこと、救世軍の婦人保護ホームのことなどを紹介している。

THE DELIVERERには英国国内のみではなく、各国の女性士官からの報告が掲載されており、救世軍組織内における女性の働きと大きさがわかる冊子である。上記の民子の報告も④のものは帰国後に書かれたものである。

民子は上記の女性施設で社会事業の研鑽を積むことを、その頃ロンドンを訪れた軍平と相談の上決めたと記している⁽²⁶⁾。軍平はロンドンにおける救世軍最高幹部会議に出席するため、この年万国救世軍を訪れているので、その時に帰国後日本救世軍で役に立つことを想定して民子にCotlandでの訓練を勧めたのであろう。

後年民子は彼女が実習で滞在した施設の詳細や、そこで起こった出来事を著書で紹介しているが⁽²⁷⁾、現場で働く多くの女性士官たちの働きぶりを見つめる民子の眼差しはしっかりとっていて、その働きを受け継ごうとする静かな意思が記述から感じられる。

また最後に付け加えておくが、英国にある民子の履歴カードには、1939年にKobayashi Shuzo という人物と婚約したことが記されていた。民子の婚約者の名前が記載されている資料を全く日本で目にする機会がなかったので、筆者はロンドンの資料館で初めてその名前を知る

こととなった⁽²⁸⁾。

(6) 帰国後の民子

英国救世軍で研鑽を積んだ民子は1929年(昭和4)5月大尉(Captain)に昇格し、同年8月1日附で日本救世軍本営へ移動辞令が出て帰国の途につく。帰国後彼女は1929年(昭和4)帰国から-1941年(昭和16)に救世軍が救世団となって日本基督教教団へ合同されるまでの約12年間を日本救世軍本営に所属し、士官学校教官、同女子部主任、社会部婦人及び児童のための事業主任等を歴任した。

「帰朝すると常時父が指導していた救世軍で主として社会事業と教育の部門に責任を持ち働いた。その他東京女子大学の理事や人事調停委員、司法保護委員等も勤めていた。」⁽²⁹⁾

ところで秋元巳太郎原著『神の国をめざして 日本救世軍の歴史2(1927-1946)』では、1927年(昭和2)-1935年(昭和10)を救世軍の成長と充実の時代、その後の1936年(昭和11)-1946年(昭和21)までを苦難の時代としている。しかし救世軍の働きが充実した時期であったとはいえ、1931年(昭和6)9月満州事変、世界恐慌による経済の悪化、東北凶作等の勃発による社会不安や失業者の増大など、不安定な社会へと時代は移り変わっていった。そのような流れの中で1938年(昭和13)には、救世軍内部でも改革運動を主張する強硬派と穏健派の対立騒動が起こり、その内紛は世間でも話題になった。次第に世の中は救世軍受難の時代へと進んでいた。

このような辛苦の時代の始まりとも言える1936年(昭和11)に、『寄生木の歌』が『日刊基督教新聞』に半年に渡って掲載された。『寄生木の歌』は民子誕生から母機恵子が没した17歳までの生活や、両親の意向に自分を添わせきれない思春期の民子の葛藤を記した回顧録である。36歳という人生の成熟期に入った彼女は、これを書いたことで若き日の葛藤

から脱皮し、充実した仕事に邁進する現在を肯定しているように見える。

しかしこの後、特に昭和12年から15年までの間、山室家では長男武甫の結婚という慶事はあったものの、その後は家庭的な不幸が多く続く。

1934年（昭和9）長男武甫が近藤富士と結婚

1937年（昭和12）軍平の後妻悦が長く認知症を病んだ後に逝去

1939年（昭和14）3月14日民子、Kobayashi Shuzo と婚約

1939年（昭和14）富士がウイルス病にて逝去（享年39歳）同年民子の婚約者も死去

1940年（昭和15）3月軍平死去

このような不幸が続いた時期の民子の活動について、『ときのごゑ』には以下のような記事が掲載されている。

「婦人から観た禁酒問題」

女性、特に母の立場から禁酒を奨励すべきことを強調している。時局柄米不足に頭を悩ます状況からもコメの無駄遣いである酒の消費を慎むようにと呼びかけている。

第一千二十九号，昭和15年2月11日

「楽しい藪入 婦人ホームと世光寮」

1月16日世光寮での藪入の会を山室中校の司会にて開催。
第一千五十四号，昭和15年3月1日

「高知の山室民子中校」

エルス夫人の病床見舞いに高知へ。23日夜小隊会館にて講話，回心の兵士の入隊式を挙行。

第一千五十六号，昭和 15 年 4 月 1 日

「故山室中将病床日記」

臨終に至るまでの軍平の病状や，家族との会話等が民子によって日記形式で詳細に記されている。昭和 15 年 5 月 1 日～7 月 1 日まで五回にわたり掲載。

以上のような記事を読むと，この時期民子は救世軍においては，通常の士官としての業務のみならず，娘として軍平の筆頭介護者の役割を否応なく担わねばならない存在になっていたと考えることができよう。

II 山室富士について

(1) 生い立ち

次に武甫の最初の妻富士について紹介しよう。富士の夫武甫が富士



富士『評伝山室富士』より

亡き後書き下ろした『評伝山室富士』⁽³⁰⁾によると、彼女は1901年（明治34年）11月17日栃木県佐野の地に近藤貞吉の次女として生まれた。幼少期から学校の成績も良く、県立佐野高等女学校入学後も優秀な成績を収めたという。

父近藤貞吉は、明治4年5月12日生まれ。早稲田大学前身東京専門学校邦語政治科に学び優秀な成績で卒業。地元では10期40年間町会議員を務め自治制施行50周年に際し、佐野町から唯一人自治功労者として表彰されたほど地元尽くした人物であるが、その気質は代々受け継がれてきたものであったようだ⁽³¹⁾。

また貞吉の弟は、早くから基督教や社会主義の影響を受け明治35年に受洗、富士の姉喜代も叔父の感化により教会員となっている⁽³²⁾。

富士の基督教への傾倒は、それらの環境、特に姉喜代の影響が大きいが、機恵子が昇天した1926年（大正15）に喜代から誘われて救世軍佐野分隊の特別集會に初参加したことが入信の契機だという⁽³³⁾。

その後富士は1919年（大正8）9月第15期生として救世軍士官学校に入学、士官学校教官になった後、1925年（大正14）6月末に軍平と共に渡英し、一年間欧米各国の救世軍事業を組織的に視察研究している。士官学校では軍律を主に担当したが、同時に当時としてはかなり進歩的な女性でもあったようで、富士の先輩である士官学校校長指田大佐補は、富士の葬儀の際「まだ近藤さんの時代によく憤然として私の部屋にやって来られたことがありました。（中略）男の人たちが婦人の地位、婦人の活動に対して云々されると必ず憤然とされる。私も同感なのですから、よくご相談に乘りました。」と思いを語っている⁽³⁴⁾

1934年（昭和9）12月10日（月）富士は武甫と結婚した。昭和11年4月30日長男信雄、13年4月8日長女喜恵子誕生。しかしながら昭和14年頃より腎臓炎を病み、病はその後ウイルス性病と病名確定。昭和14年7月11日に逝去。享年39歳という若さでわずか6年に満たな

い結婚生活であった。

(2) 富士、機恵子、悦に共通する生き方

この様に富士の生い立ちや救世軍入隊までの軌跡、そしてその後の生き方等を概観すると、富士の生涯は、機恵子と共通する点があることに気づく⁽³⁵⁾。機恵子がそうであったように、富士もまた儒学思想を重んじながらも、同時に基督教を受け入れる父親や叔父のもとで家庭的に恵まれ豊かな教育を受けた。そしてそのような育ちの土壌の中で、十分に聡明で思索的であった故か、知に傾倒する生き方よりも「貧しい人、世に顧みられぬ人のため」に自分を捧げようと救世軍士官になることを決意しているからだ。

そして結婚後も「二枚の下着を持つなという主の教えをかくも厳重に守られた方を他に多くは知りません。」⁽³⁶⁾と後年葬儀で語られたように徹底した清貧を貫き、病を得てからは、小川正子の『小島の春』の新刊書を手にして非常に感激し、妹文子に向けて二人の愛児を人道の戦士として捧げると告げたという⁽³⁷⁾。

このような富士の姿は、かつて瀕死の床にあった機恵子が「神第一」と書き残した姿と重なりあう⁽³⁸⁾。

それは同時に機恵子のみならず、後妻として軍平に嫁いだ悦にも通じる。軍平は悦について「とにもかくにも相当の家の娘として生まれたが、その結婚生活が多くの犠牲献身を意味するものであり、全く一本の蠟燭の、身を焼き、身を溶かし、身を無きものにして、光を周囲に興うるに似た生活であった」⁽³⁹⁾と語っているからである。

本稿では字数の制約上これ以上悦の生き方については多く触れないが、上記のような夫軍平の語りからは、悦もまた機恵子同様「己に死んで基督に生きる、所謂聖潔の恵を味わう」⁽⁴⁰⁾生き方を選び、それに殉じた生涯であった。それは乏しい家計のやりくりをしながら先妻の子と自分の

愛児とをひとつ屋根の下で育てるといふ、経済的にも精神的にも相当な葛藤と犠牲を伴う生活であった。

生まれも育ちも良く、教育を受ける機会にも恵まれた彼女たちは当時の社会ではかなり進歩的な女性であったはずだ。だがそのエリート女性である彼女たちが自ら好んで清貧に徹し、他者救済に徹する生き方を志した点に筆者は関心を抱いている。彼らにとって他者のために自己を犠牲にすること、それこそが究極の自己表現であったように思われるからだ⁽⁴¹⁾。

(3) 山室家の内実に触れる阿部光子の小説

では富士の現実生活は実際どうであったのだろうか。残念ながら富士に関する具体的な資料は『評伝山室富士』以外にほとんど見つからないが、後年武甫の後妻である阿部光子が書いた『献花』⁽⁴²⁾には、富士と思われる「Kの母」と、民子と想定される「夫の姉」の姿が描かれている。以下Kというのは富士の長男信雄、この姑とは悦のことであると想像できる。

(前略) Kの母が三十何歳で世を去ったのには、様々な伝説がある。最後の入院の時、本家に電話をかけると、電話に出てきたのが夫の姉で「また入院ですか。お金がかかりますね。」と言った。Kの母は死ぬまでこのことを苦にしていた。あの家で人間らしいのはおとうさまだけだ、とも言った。

(中略) この姑の臨終を看取った疲れで、夫の先妻は亡くなった。私の縁談が決まってから夫の姉は私と母との前で言った。「勝気な人なものですから、いいと言うのに妊娠中、無理して看病を続け、子供を産んですぐに死にました。上の子は3才になるのにおむつがとれていず、ふたりの子を引き受けたわたくし共の苦労は一通りや二通りではございませんでした。女中任せでは夜の集會にでられませぬし、私ども公の活動をずいぶん阻害さ

れました。父もこのことを案じながら亡くなりました。」

おそらくこのように富士は家庭内では小姑に気を使い、病身であるにも関わらず、姑の看病に頑張り抜いたのであろう。小説ではあるが、病身にも関わらず姑悦の看護に励む気丈な富士の様子と、病状の深刻な富士を気遣う前に、度重なる入院でかさむ出費の心配をし、富士亡き後は信雄と喜恵子の世話に苦勞する民子の正直な嘆息がここに描かれているように思う。

光子は女流文学賞を受賞した『遅い目覚めながらも』⁽⁴³⁾に代表される、山室家の内実を題材とした小説を書いており、『献花』もそのジャンルに入るものである。それゆえ小説ではあるが、当時の山室家の状況を知る参考資料となり得ると考える。

このように富士は1939年（昭和14）に死去したが、この時期は民子の婚約者の死去、翌年軍平死去と山室家では不幸が相次いだ。また軍平死去直前に彼の著書『平民之福音』が発禁となり、さらにその後日本救世軍は万国本営から離脱することを求められ、同時に救世軍の組織の名称を、「帝国陸軍」を模倣した組織と呼称であることを理由に救世団とするように求められるなど困難が相次いだ。このような時期に光子は武甫と結婚したのである。

Ⅲ 阿部光子について

(1) おいたち

本名は山室光であり、阿部光子は作家名である。彼女は父阿部充家・母しげの次女として1912年（大正1）12月25日に生まれた。6人兄弟の5番目であるが、姉が早く結婚したので一人娘のように育ったという。



阿部光子（『日本女子大学に学んだ文学者たち』翰林書房，2004年より）

父充家は熊本出身で徳富蘇峰主宰の国民新聞の記者であったが、国民新聞社副社長、京城日報社長を勤め、朝鮮事情通として「始終朝鮮を愛し、『朝鮮公使』と称せられる」⁽⁴⁴⁾人物でもあったようだ。

母しげは軍平と同じく岡山県高梁二位の生まれで、幼いころに近くの教会堂で若き日の山室軍平の話聞き信仰に入る決断をしたという。女学校在学中ピューリタンの先生たちから教育を受け、浪速教会の宮川経輝牧師から受洗、卒業後は日本基督教婦人矯風会で初めての有給職員として『矯風会雑誌』の編集に携わった女性である⁽⁴⁵⁾。

このようにコスモポリタンの父、世の光になれという「おそろべきピューリタン」の母⁽⁴⁶⁾という、当時としてはかなり進歩的な家庭で育った光子であるが、日本女子大学在学中に左翼活動参加の嫌疑をかけられ同校を中退する。

その後小説に目覚めた彼女は、1941年（昭和16）に処女作「猫柳」（『文学界』）が芥川賞候補となった。結婚後も作家活動を続けていたが、「遅い目覚めながらも」（『新潮』）で第五回田村俊子賞を受賞するまで長

く売れない日々が続いた。その後50歳を過ぎて日本聖書神学校に入学し、卒業後は日本基督教団和泉多摩川教会牧師となる。家庭では先妻の子である信雄と喜恵子の他に四人の子供を産み育て、2008年（平成20）に96歳の天寿を全うした。

(2) 反対された武甫との結婚

光子と武甫の結婚の経緯については以下のような彼女自身の記述がある。

イエスキリストが明日のことを思いわずらうなどおっしやったのは全くそのとおりだと思いましたが、十人が十人、私を貰いたくないといいましたから嫁の貰い手はないと思ひ込んでいましたところへ世間は広いもので嫁の来てのない男と言う者もいたのです。（中略）ところが世にも不思議なことがあるもので、この男私をもらおうというのです。私は危ういと思ひましたから、一番嫌がることを言ってみようと思ひ、「私は小説を書きますが、それでもよろこばいますか」と尋ねました。するとまたこの男は「聖書には人責めいつわりて様々の悪しき事を言うとも喜べとあるから、自分をモデルにして何を書いてもかまいません」といふのです⁽⁴⁷⁾。

またかつて小説家を志す以前に日本女子大学の社会福祉学科に入学していた光子は、その学科選択の動機を「決断するとき、わがまを捨てるのが習性となっていた私は託児所経営を選び、当時貧苦のため子を殺して母も死ぬ母子心中事件が続発していましたが、そのお母さん方の力になろうと決心いたしました。」⁽⁴⁸⁾とも語っている。

しかし武甫との結婚には多くの人が反対したようで、卒業した女学校の先生までもが家に来て止めさせようとする場面を光子は小説『一粒の真珠』に描いている。

先生は私が結婚すると決意した家の近所に長年住んでいたの、余りにも浮世離れした家庭とその下敷となって五十何歳かでぼけて死んだ会長夫人一夫の継母—とその看病疲れでウイルス病というめったにない病気で死んだ長男夫人（富士）のことを細々と語り、そのあとに入るなどとはとんでもないことだと言った⁽⁴⁹⁾。

だがクリスチャンの母に育てられ、キリスト教信仰に基づく奉仕の精神を内に秘めていた光子は、2人の遺児を抱えた武甫に、小説を書く事を許容されたことで結婚を決意した。他者への奉仕と執筆活動の継続、この二つが融合できる生き方を選択できること、それが彼女にとって武甫との結婚に踏み切った大きな要素だと思われる。つまり光子もまた機恵子の志した「他者救済」への志向を内に秘めていたのである。

(3) 山室家を批判的に描く光子の小説

このように武甫と結婚した光子は、民子を筆頭とした山室家の一員に連なり、先妻の子を養育しながら文学を続けていく道を選択したが、さすがにその両立は容易なものではなく、その後長く女流文学賞を受賞するまで売れない時代が続いている。

佐古純一郎は彼の評論「阿部光子の『遅い目覚めながらも』について」の中で「阿部さんの作風は概ね私小説的な発想をとっており、殆どその私生活の現実に素材を選んでいくものである」⁽⁵⁰⁾と述べているが、既に本稿の前項で取り上げた『献花』の中で民子が亡き富士について語った物言いが全くの作り事でないとするれば、彼女の態度はかなり冷淡であろう。実際の民子はどうかであったのだろうか。また民子は光子をどう感じていたのだろうか。それを知る手掛かりとして近年昭和19年に8ヶ月に渡って書かれた民子の生活日記が救世軍資料館から見つかり、それに

よってこの時期の山室家の生活の様子を探ることが可能になった。

IV 民子の日記

(1) 日記が書かれた頃の時代模様

日記は1944年（昭和19）1月12日から9月1日までほぼ毎日記されており、当時は生前軍平も住んでいた羽沢の家⁽⁵¹⁾で共に暮らす山室家の人々の様子や、当時民子と付き合いのあった人々との交流等が記されている。

当時民子は日本基督教団厚生局に所属し、厚生局主事、第三部母性保護委員として教団の傘下で働いていたので、日記には多くのキリスト者の名前が記され民子の交友の広さを知ることができる。

当時羽沢の家には次女光子（北京勤務で時折帰国）、三女善子、悦の長女徳子、そして先妻富士の遺児である信雄（7歳）と喜恵子（5歳）、武甫と光子夫妻、そしてお手伝いの久さんが同居していたようである。だが善子と徳子は羽沢の家以外にも近くに住む場所があったようで、頻繁にそこから泊まりに来ている。この時期光子は武甫と結婚してまだ半



山室家の食事風景。左から喜恵子（顔が半分見えない）、信雄。信雄と向かい合っている女性は光子（みつ）であろう。右側の男性は武甫であろう。

年から一年位である。

この頃既に救世軍は救世団と名称変更，伝道部門は教団傘下である第11部門に入り，社会事業部は教団の外郭団体として「日本基督教愛隣会」と改称，財団法人設立を申請し許可されていた。その翌年3月末を持って日本基督教団は部制を廃止して完全合同となり，改称した「財団法人基督教愛隣会」も日本基督教団厚生局管轄下に置かれた。戦局は厳しさを増し，食料の調達等家庭生活の維持にも大きな苦勞を伴う時期であったようだ。

ここでは以下に日記の一部を抜粋紹介し，日記から明らかになったことを記してみよう。

(2) 民子が綴る毎日一日記から明らかになったこと

①民子が武甫の就職について心配し，知人に就職を頼むなど，細かな配慮をしている。

1月 3日（月）益富さんに立ち寄り武甫さんのことに関して談合あいて帰る。

2月 3日（木）生江先生来訪，武甫就職のことにつき対談。武甫さんとも話す。

3月22日（水）武甫さんは愛隣会主事として勤務のこととなる。決まって良かった。けふ武甫さんは湯河原へ行った。

②家族を大切に思う気持ちが強く，特に妹たちとは絆が深い。

2月19日（土）朝九時半日比谷の満州石油にて，健三叔父様にお目に掛る。お元気そうで喜ばしい。野口ひで子さんとそのご次男にも会う。叔父様に周平（民子の弟）のことをお礼申したり，様子を伺ったりした。武甫や一家のことをお話した。山室全集編纂の事業の為金

五百円也頂き感謝に堪えない。

3月19日（日）昼は光子が粉で珍しいものを作ってくれた。午後五郎叔父様と巍さんの家に光子と行き、暖かきもてなしを受ける。光子、信雄と共に淀橋へ行き、徳子手製の夕飯のご馳走になる。善子も来た。

6月24日（土）（前略）善子、徳子に武甫さんが栃木方面から持ってきた白米のご飯を食べさせたく、また入浴せしめたく電話を懸く。徳子だけが来た。ご飯は詰めて善子に持ち帰る。

③民子は信雄・喜恵子の世話を良くし、その健康状態を頻繁に日記に記している。武甫が光子と結婚しても、民子は妹の善子や徳子とよく二人の面倒を見ていた。

1月6日（木）信雄と喜恵子を連れて、歳子さんに信雄のしもやけと喜恵子の目を診てもらう。

1月29日（土）信雄が早く暗い中に起きピアノを弾いて出かける。寒いのに病後でもあるのにと感心もし、いじらしくもある。喜恵子も経過よく八時半に生活団へ出かけて行った。

4月3日（月）信雄、喜恵子が阿部老婦人（光子の母）の所へいったので迎へに行き野原で少しもちくさなど摘む。

7月29日（土）（中略）信雄、喜恵子共に一週間お腹を壊すこともなかったようでよく陽に焼け丈夫そうになって嬉しい。

④阿部光子に関する記述は好意的なものが殆どである

民子には光子という妹がいるので、彼女のことは「みつさん」と記している。山室家に入ってくれたみつさんを優しい眼差しで見つめ、自分

の妹達と同じように分け隔てなく扱おうとしている姿勢が見られる。この日記では彼女に対する批判めいたことは記されていない。

1月 7日 (金) (前略) みつさんが大いに努力するので感心もし、心強く感じた。

2月 25日 (金) みつさん疲労の気味で昨日医者に行かれたと聞いたがけふは元気のように安心した。

3月 12日 (火) 善子は横浜へ帰ったが、徳子は泊る。こたつを囲み、光子、みつさん、徳子とお茶をのみ且つ話し合う。

4月 16日 (日) 今日の昼食は一同揃い、光子の送別と信雄の誕生日を兼ねたような意味で執る。みつさん苦心のお赤飯、吸物、カニの寄せ物羊羹、インゲン甘煮の口取りなど。

5月 12日 (金) 丸善にてみつさんと自分のため手提げを買った。

6月 19日 (月) 帽子店で夏向けターバンを一つ買う。かぶり心地よく善子、みつさんにも買ってあげたいが拾貳円ではそう容易くはない。信雄のため文鎮、水入れ、筆など買う。

また急に機嫌が悪くなった光子の様子に戸惑う書き込みも見られる。

6月 27日 (火) みつさんにトランクを持ち上げることを手伝って貰いひどく機嫌を害された。とにかくみつさんにターバン、喜恵子にベレーをお中元として渡す。いずれも良く似合いで愉し。

⑤光子(みつ)が文学の会に出席する為に頻繁に外出している様子が見られる。

1月 10日 (月) 信雄不快、学校欠席。みつさん三田文学の会に行く。

1月 11日 (火) みつさん佐々木氏方へ行く。

2月 20日 (日) (中略) 午後武甫さんもみつさんも鶯の会で外出した

ので子供と留守をした。

4月23日(日) みつさん芹沢氏方⁽⁵²⁾に行かれ、午後魚の配給など取りに行く。(後略)

5月27日(土) けふ文学報告会集会にみつさん行く。「なるべくはやく帰ろう」と言ったら遅い方が良いとの返事に午後事務所により諸用を為す。

⑥民子の密やかな文学への関心の継続がはっきりと記されている。万葉集を毎晩読んだり、習字を習ったり和歌づくりにチャレンジしたりしている様子が記されている。

2月1日(火) 出かけに山崎先生方に立ち寄り習字を見ていただく。(中略) 万葉集巻七を読む。

4月23日(日) (前略) 万葉集巻一、二「アララギ」四月号等通読。歌作を試みたがどうも疲労が抜けきれず成功せず。

5月22日(月) 午後賀川先生御来訪、厚生局室にて齊藤潔らと談じておられた。武甫さんの新島先生の歌を見られたらしく褒めて「武甫は叙事詩がうまい」と言っておられた。私については盆栽のごとく小さくなり伸びるべきものが伸びないでいると言われ、反省させられた。また何か書いているかといわれるので印刷の見込みもないから書かぬ旨お答えすると、自分はいつ印刷になるとも分からぬものを書いていると言われた。夜 万葉集巻七、八、九等読む。

8月5日(土) 今井邦子先生宅に行く。用事とのことで何かと思ったら、「日本短歌」編集主任を引き受けぬか、本格的に歌道に精進してみてはどうかといふお話で、先生のご好意嬉しく感謝した。

⑦戦時中なので、食べ物確保に腐心・苦慮する民子の心情が表れている。普段の食事が質素な様子が伺え、食事に招かれ感激している様子もあるが、それ以上に交友関係に気を遣い、多くの知己に自分が手に入る食品を頻繁に届ける様子が記されている。

3月23日(木)(前略)午後矯風会に赴き天橋愛隣館法人申請に関し久布白氏と面談、帰路植村さんに立ち寄りすっぽんスープを届けたが招き入れられ、おいしいトーストとリプトンティーのもてなしを受けた。

5月23日(火)(前略)夜は善子と植村環先生のお宅で夕飯ご馳走になる。何時から心がけておられたのであろうか。文字通りの山海の珍味が並び、心のこもったお料理を真に嬉しく頂戴した。

6月12日(月)(前略)オリンピックでもずくを買うつもりなりしも買えず、垢拭いのコウセイとかいうものを一本得てそれにピーナツバター一瓶添え吉川氏方に届けた。夫人は昨日から麦刈りをしておられる由、お握りを頂く。家のご飯は水っぽいのに久方ぶりで強いご飯を頂き、何か力がつくように感じた。

⑧民子自身は自分や家族のために貯金をしていた。

昭和19年12月分月給興計算書(明細書)が日記帳に添付されている。日本基督教団財務局から彼女が受け取っていた1カ月の給料は、140円であった⁽⁵³⁾。また家族のために貯金もしっかりしている。

山室潔据置貯金通帳 金504円76銭也

生命保険 保険金壱千円也

簡易保険 131円40銭也

郵便貯金 二本

定期預金 金壺千六拾円也 住友銀行神田支店

まずこのような日記全体から伝わって来るのは民子の家族を大切に思う気持ち、家族愛の深さである。彼女は武甫の就職や弟周平のことで人に依頼し、またお礼を言うなど親のように気を配っている。また信雄や喜恵子の毎朝の体調管理にも気を配り、妹たちとも頻繁に協力し合うなど、軍平亡き後の山室家の筆頭者としての責任を果たそうとしているように見える。また家族のために貯金も怠らない。そして民子だけではなく、妹の光子、善子、徳子らは既にしっかりと自立している様子で、よく民子を助けている。彼女たちと姉民子の関係は、姉妹ではあるが、自立したもの同士として認め合う様子が伺える。

またこの時期は、みつに対してもターバンを購入するなど、姉妹と同様の扱いをしている様子が日記からも伺える。

また同時に注目したいのは、民子が忙しい日々の中でも和歌を作り万葉集を読む時間を持っていた事である。民子にとって文学的な営みを日々の中で継続し続けることは、自分が自分で有り続けるために必要なことであったと想像する。

一方光子（みつ）は、山室家の中でまだ存在感は薄いですが、三田の会等文学の集まりに出席するために、よく外出していることが記されている。時に光子の機嫌が悪くなって民子が困ったという日記の記述からは、正直に自分の気持ちを表に出す光子の性格が感じられて興味深い。

おわりに

以上のように民子を中心に、富士、阿部光子という山室家に尽くした女性たちの軌跡を概観した。

山室家は一切の私有財産を持たず清貧を貫いた山室軍平と、他者救済に命をかけ夭折した機恵子が結婚して築いた家庭である。子供たちは幼少から一切の贅沢をせず、人のために尽くすことこそ神の意志に叶った生き方であると教えられていた。その家に嫁として入った富士と光子は、彼らの偉業を感じつつ、自身もその一旦を踏襲しようとの熱き思いがあったはずである。富士が病身を押して認知症の悦の介護に務めたのも、光子が周囲の反対にもかかわらず、子連れの名もめである武甫と結婚したのも、それが光子の言う「決断するとき、わがままを捨てることを習い性とする私」の志向にかなう道だと思ったからであろう。そしてそれは民子についても同様ではないかと思う。民子は最終的に軍平の思いを受け入れる形で救世軍士官になった。それは自分の希望を断念する形となったが、一方で彼女には、自分の意思を「万人の公僕となる大義」より優先することに対する罪悪感があったのではないだろうか。それゆえ最終的には自分の意志を通すことを止める、すなわち自身のわがままを捨てる形で献身の決断をしたのではないだろうか。もしそうであれば、機恵子の他者救済の精神は、民子、富士、光子にしっかり受け継がれていると考えても間違いではないだろう。

だが機恵子―悦―富士の人生に共通して見られる、他者のために自身を顧みずに死ぬまで人に捧げ尽くす「自己滅私による他者救済」の意識は、民子と光子には感じられない。

民子は家庭と職場で忙しく働き人の面倒を見ているが、そのような忙しい生活の中でも文学への志を継続し歌作りを続けている。それは光子も同様で、彼女も後妻として山室家の主婦となり家事をこなし、信雄や喜恵子の養育に当たる日々であるが、文学の会にしばしば出向き、小説を書き続けている。他者に尽くすことと、自分が自分で有り続けるために必要な営みを継続し、両方を共存させながら生きる自立した姿がそこにはある。機恵子が示し、悦、富士と続いた自己滅私により他者救済を

なす特攻隊のような自己犠牲の精神は、民子と光子の中では、他者も自分も生かしてゆくものへと静かに流れが変わっているように思えるのである。そしてそれはむしろ相互の満たされた関係性の中で救済し、されることの意味を一層深めていく流れではないかと考えるのである。

このように民子と光子には互いの生き方に相通じるものがあるが、光子は小説を書き続ける中で民子をかなり批判的に描くことが多い。光子が民子をシニカルに描写した背景には、2人の性格の違いから起こる摩擦が所以なのかもしれないと思う。きちっとした性格が日記から想像される民子と、徳富蘇峰記念館に保管されている光子の3通の手紙からは⁽⁵⁴⁾、細かいことにこだわらない大雑把といっても良い、底抜けに明るい彼女の性格を知ることが出来るからである。

注

- (1) 軍平の次女も光子という。本稿では武甫の後妻である光子を彼女のペンネームである阿部光子、また文脈から彼女だと分かる場合には光子のみを使っている。
- (2) 山室武甫「大患と臨終」『山室軍平にふさわしき妻機恵子』玉川大学出版部、1965年、P169。
- (3) 最近の研究動向として、昨年刊行された安原みどりの『花巻が育んだ救世軍の母—山室機恵子の生涯—宮澤賢治に通底する生き方』銀鈴叢書、2015年がある。安原は主に山室機恵子の生涯を同郷の宮澤賢治と通底するものとして論考を進めている。山室軍平とその家族を取り上げた書として画期的であるが、一貫しているのは安原氏が機恵子に抱く畏敬の念である。本稿は民子、富士、光子に焦点を絞り論考を進めている。
- (4) 救世軍の掟として結婚は救世軍の中の者同士に限られている。
- (5) 「寄生木の自由(8)」『寄生木の歌』(103) 日刊基督教新聞、1936年3月13日発行にその思い出が綴られている。
- (6) 山室民子「半生を顧みて」『新椿』、1947年P18。

- (7) 山室民子「アメリカで受取った父よりの手紙」『愛は永遠に一愛と信仰』日本学芸社, 1948年 P108-111。
- (8) 日本基督教婦人矯風会の千本木道子(1889 - 1951)のことであろう。この年5月彼女は研究、視察のため渡米し、太平洋沿岸を講演旅行に回っている。『日本キリスト教婦人矯風会百年史』ドメス出版, 1986年 P439, P1027 参照。
- (9) シカモア教会創設者。久布白落実の父。徳富蘇峰、徳富蘆花の身内。久布白落実『廢娼ひとすじ』中央公論社, 1973年参照。
- (10) 田中景「20世紀初頭の日本・カリフォルニア「写真花嫁」修行—日本人移民女性のジェンダーとクラスの形成」『社会科学』2002年を参照。
- (11) 山室武甫『在米同胞の先覚小林政助伝—救世軍在米日本人部の活動』「山室軍平選集」刊行会, 1963年, P161。
- (12) 同上 P161。
- (13) 1866年に会衆派の牧師たちが設立した米国西部での最初の大学院レベルの神学校。エキュメニカルな教育方針をとっていた。『日本キリスト教歴史大辞典』の太平洋神学校 P817 一部参照。
- (14) 救世軍創始者ウィリアム・ブースは福音主義、自由主義神学とは異なる。
- (15) 「わが子に語る」『婦人之友』2月号, 婦人之友社, 1927年。
- (16) 前掲『花巻が育んだ救世軍の母—山室機恵子の生涯—宮澤賢治に通底する生き方』P343。
- (17) 「我が酒杯は溢るるなり」『新女苑』実業之友社, 1950年, P46。
- (18) 「神への道をひとすじに」『主婦と生活』主婦と生活社, 1949年, P53。
- (19) 同 P46。
- (20) 同 P47。
- (21) 山室民子『女性と生活と宗教』女性新書, 1947年, P211。
- (22) 1912-1980 Salvation Army for Mothers and Infants. 1953年に Crossways と名前が変わる。http://www.motherandbabyhomes.com/ 参照。
- (23) 前掲『女性と生活と宗教』P76-77。

日本救世軍山室家の女性たち

- (24) 前掲『新女苑』P47。
- (25) 1889-1917, 1919-93 まで発行されていた救世軍女性事業部の定期刊行冊子
<http://www.nationalarchives.gov.uk/nra/lists/GB-2133-SA.htm> 参照。
- (26) 前掲『新女苑』P46-47。
- (27) 「万年筆の発見」1934年1月1日『大阪毎日新聞』掲載や「暗黒に落ちてゆく前に」『婦人之友』1929年11月号などがあげられている。
- (28) 彼は救世軍士官であったことしかまだわからない。
- (29) 前掲『新椿』P17-19。
- (30) 山室武甫『評伝山室富士』救世団出版及び供給部, 1941年。
- (31) 同P144参照。
- (32) 同P146参照。
- (33) 同P150参照。
- (34) 同P238参照。
- (35) 機恵子については牧律「山室機恵子の結婚—軍平の再婚論争に絡めて」『キリスト教史学』第65号, キリスト教史学会, 2011年を参照のこと。
- (36) 関西教区部長西部清一夫人周子氏の追憶。前掲『評伝山室富士』P219。
- (37) 同P232参照。
- (38) 前掲『山室軍平にふさわしき妻—機恵子』P171。
- (39) 山室軍平『山室悦子』救世軍出版供給部, 1937年, P19。
- (40) 同P7参照。
- (41) 筆者は自身の論文「山室機恵子の結婚—軍平の再婚論争に絡めて」『キリスト教史学』2011年P161で, 機恵子が明治女学校で学び, 自己を忍従から積極的献身へと解き放つ教えとしてキリスト教を受容した可能性を指摘している。
- (42) 阿部光子『献花』新潮社, 1987年P19-20, P40-41。
- (43) 阿部光子『遅い目覚めながらも』新潮社, 1969年。
- (44) 神奈川県中郡二宮町にある徳富蘇峰記念館には, 阿部氏に関する資料が公開されている。

- (45) 青木生子『日本女子大学に学んだ文学者たち』翰林書房, 2004年, P267。
- (46) 同 P267 参照。
- (47) 阿部光子「私にとっての神」『世紀』世紀編集室, 1979年12月, P70。
- (48) 同 P69。
- (49) 阿部光子「一粒の真珠」『旅路のおわりではなく』新潮社, 1970年, P12。
- (50) 佐古純一郎「阿部光子の『遅い目覚めながらも』について」『世紀』世紀編集室, 1969年6月。
- (51) 山室武甫『人道の戦士 山室軍平』玉川大学出版部, 1965年によると, この家は佐藤市十郎が自分の持家を軍平に無償提供していた。
- (52) 小説家芹沢光治良のこと。
- (53) 「昭和18年陸海軍人給与データ」(大濱徹也・小沢郁郎編『帝国陸海軍事典』同成社, 1995年, P311)で階級の真中あたりに位置する准尉の月給が110円であったから, それから判断すると彼女の給料は世の中の平均より幾分高い額ではなかったかと考える。
- (54) 二宮町にある徳富蘇峰記念館には, 光子が徳富蘇峰とその家族に宛てた手紙が3通残されている。